

法政就業力通信

～今月のさんぽ道～

法政大学

就業力育成 3D 教育プロジェクト

<http://3dep.hosei.ac.jp/>

就業力育成3D教育プロジェクト

私たちは時間制約のもとで生きている

教授 藤村博之（ふじむら ひろゆき） プロジェクトリーダー



略歴

84年名古屋大学大学院卒
京都大学博士（経済学）。

84～89年京都大学経済研究所
助手、90～97年滋賀大学経済
学部助教授・教授。

97年～03年法政大学経営学部
教授、04年～IM研究科教授。

e-mail:

fhcdc@hosei.ac.jp

研究室は新一口坂校舎4F

私たちは制約条件のもとで生きている

予算制約と時間制約は、経済学でよく使われる概念です。私たちは、お金と時間という限られた資源を持っており、それを何にどう配分するかという意思決定をしながら生きています。使っても使ってもなくならないような資産を持っていれば、予算制約からは解放されますが、そういう人は例外的です。大多数の人は、手持ちのお金を何に使うか、頭を悩ませます。

時間制約は、全員に課せられている制約条件です。1日は24時間しかありません。お金を使えば、自分の代わりに家事をしてもらうとか調べ物をしてもらうという形で時間制約をある程度緩和することができますが、1日を30時間にすることはできません。

時間をどう使うか

限られた時間をどう使うかという課題は、大学生にも突きつけられています。しかし、この点を真剣に考えている学生はあまり多くないように見受けられます。例えば、出席予定だった講義が突然休講になったとします。90分という時間をどう使うかは、各人に任されています。ある学生は、友人とのおしゃべりに時間を費やすかもしれません。別の学生は、その科目について気になっていたところを調べるために図書館で時間を過ごすかもしれません。あるいは、スマートフォンでゲームに興じる学生がいるかもしれません。読みかけの本を読む学生がいるかもしれません。時間の使い方は自由です。これは良くて、これはダメというものではありません。しかし、大切な資源をどう使うかという意識は持って欲しいと思います。

考えることに時間を使う

スマートフォンを見ているときの脳の血流量と本を読んでいるときの血流量を比較した研究があります。それを見ると、スマートフォンを見ているときの方が血流量は格段に少ないことがわかります。つまり、スマートフォンを見ているときは、脳があまり動いていないのです。これは、私の体験からも納得できることです。一日の仕事が終わって電車で自宅に帰るとき、ひどく疲れていると本を読む元気が出ませんが、スマートフォンなら見るすることができます。

本を読むときは、自分の知識や経験を総動員して、文字で書かれている情景を思い浮かべようとしています。ドイツのベルリンを舞台にした小説であれば、以前、自分が行ったことのあるベルリンの風景を思い出しながら読み進めます。脳のいろいろな部分に記憶されていることを使って、著者が描いていることを理解しようとしません。読書は、相当なエネルギーを必要とする行為です。だから、疲れているときは、本を読む元気が湧いてこないのだと思います。

本を読むことは考えることです。考えることで脳は鍛えられ、発想の豊かさを発揮するようになります。目の前の時間をどう使うかの積み重ねが将来の自分をつくっていくことを学生に繰り返し伝えていきたいと思います。



コツコツを積み上げよう！

特任教員 有田 五郎（ありた ごろう）

朝9時前の教室、授業準備に行くとき数人の学生と出会う。毎週ほぼ同じ顔ぶれだ。宿題や予習・復習に取り組んでいる。なかには朝食をかじりながら…の者も。他方、定刻9時半前がラッシュとなる。履修者のほとんどがこの時間に集まってくる。さらには遅刻の常習者も…。何気ない日常風景だが、意外とここに学生それぞれの将来を見る気がしてならない。時間を大切にして時間を追っているものと、追われているものの差だ。こうしてコツコツと繰り返す、積み上げていくという努力こそが他者との違いを生んでいく。「どうすると就職活動うまく行きますか？」との質問には、1. 早くから、2. 出来るだけ多く、3. 大人と話す、と答えているが、このコツコツの実行こそが究極の回答といえる。なぜならば、自分への厳しさを鍛える機会だからだ。彼らの地道な姿勢にエールを送りたい。

略歴 70年慶応義塾大学経済学部卒。
70~06年伊藤忠商事(株)勤務、06~11年
帝京大学と法政大学職員。
11年~法政大学教員



就活「後ろ倒し」をクリアする学生

特任教員 鈴木 美伸（すずき よしのぶ）

企業の採用活動解禁が8月と「後ろ倒し」になった今シーズンも10月の内定式が終わり、多くの企業が一段落をしました。結果を見てみると、学生の内定率は好調で、倫理憲章の変更が失敗だったというトーンも低くなりました。

就活を終えた教え子達を見ていると、時期の変更はあまり関係なかったようです。順調に終わった学生の共通点は、時間の使い方が上手だということです。学生の中には8月解禁では卒論が間に合わないという騒ぐ人もおられますが、卒論を出す時期は入学時点(4年前)にわかっていることですし、採用活動の解禁も少なくとも半年以上前にわかっていることです。そんな長期のスケジュールを見ながら、やるべきことやる、諦めることは諦める、という見極めができていますのが優秀な学生です。

つまるところ、時間の使い方がうまくなる、それは大学で学ぶべきことであり、社会でも通用する立派な大学生のキャリアです。そうした学生が、社会でも活躍できる人材です。

略歴：日米ハイテク企業での営業・人事を経て人事コンサルタントとして独立。キャリアカウンセラー資格取得後は多くの大学でキャリア論の講師を務める。

「意識が高い」に「系」がつくと大変な人？！

教育支援課長 平山 喜雄（ひらやま よしお）

「意識高い系」という言葉が流行っているらしい。「意識が高い」ということは本来、良い意味で捉えられてきた言葉ですが「系」がつくとちょっと違うようで、特に就職活動においてはどこかマイナスな部分を含んで使われるようです。やたらとプロフィールを盛る、話が全て自己アピールで質問が長い、ソーシャルメディアで意識の高い発言を連発する、人脈をやたらと自慢する、人を見下すというのが特徴で、やたら「〇〇の代表やりました」や「企画大好き」で、その発言や行動の全てが「オレってすごくない？」という自己アピールになってしまう人だそう。一緒にいる周りの人も疲れそうですね。そういうばうちの大学にも…(汗)。でも、人を見下すというのはともかく、就活において自分を良く見せるということは大事なことですし、逆に遠慮しているだけは相手に気がついてもらえません。「意識が高い」ことを「意識低い系」の人が揶揄しているだけなのか、本当に迷惑な人たちなのか、それとも最近のグループディスカッション型面接の落し子なのか…実態を探ってみたい気もしますが、彼らのコミュニケーション力やバランス感覚が欠けているのは確かのように。そもそも「系」とは名詞に付いて、一つのまとまりのある関係にあることを表す語。「俺様は他人とは違うぞ」を売りにしている「意識高い」人々なのに「系」を付けられて「十把一絡げ」みたいに扱われるなんて、さぞ不本意でしょうね(笑)



法政大学法学部法律学科卒。
学務部教育支援課長

◆ インターンシップマッチングフェア

文部科学省産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業の取組「冬休み・春休みのインターンシップ マッチングフェア」が11月に実施されます。ものづくり企業やサービス企業など、インターンシップ実施企業が約30社参加します。

- ◆ 編集後記：秋です。秋と言えば食欲…もとい読書の秋です。藤村先生も書いていますが、「本を読むことは考えること」というのはまさにその通りだと思います。本の中の場面を頭の中で想像しながら読みすすめていくのは読書の楽しみのひとつでしょう。川端康成の「雪国」を名作たらしめているのは、あの「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」という書き出しを読むと、目の前にその情景が鮮やかに浮かんでくるからなのではないでしょうか。とはいえ、最近では売れた小説がすぐにドラマ化されることも多く、「えーっ、あの人が主役なのー？」というがっかり経験も多いですよ(笑) <<事務局：平山>>

法政大学 就業力育成 3D 教育プロジェクト (事務局：学務部教育支援課)

〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1

TEL:03-3264-9520 WEB:http://3dep.hosei.ac.jp/

就業力育成3D教育プロジェクト